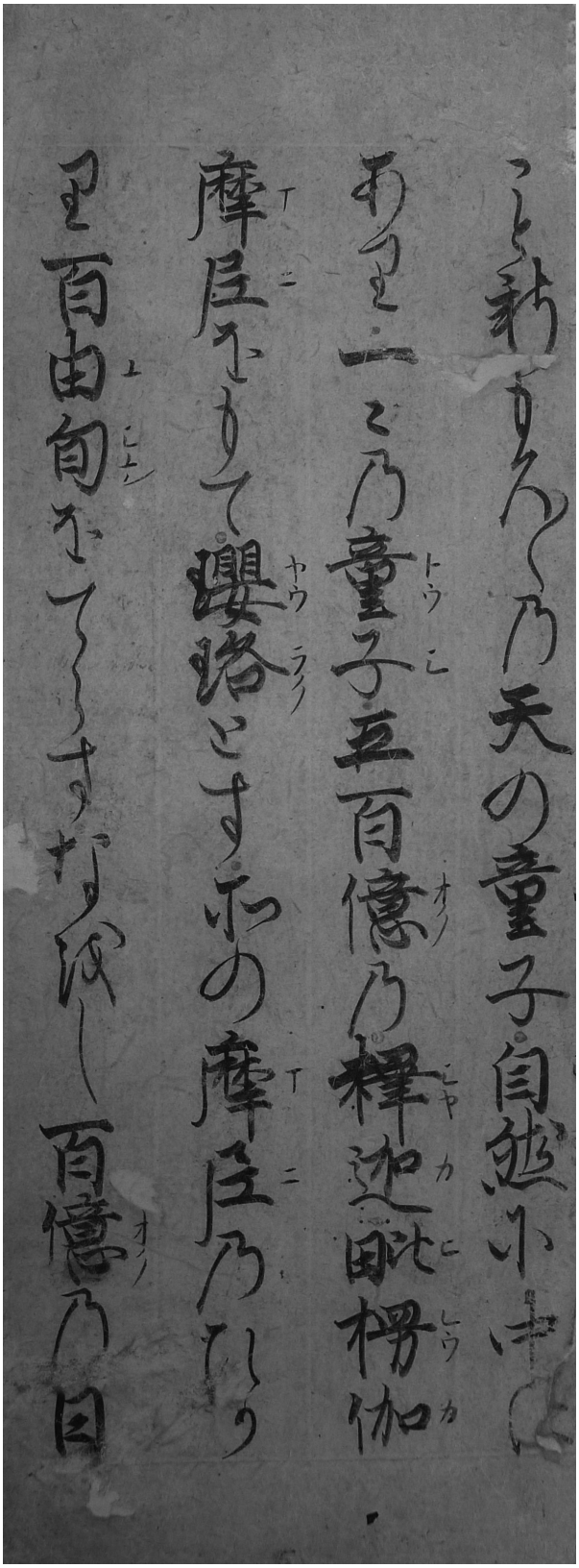
第131回貴重書展

鶴見大学図書館所蔵貴重書展



平成二十四年六月二十七日（水）～七月十八日（水）

鶴見大学図書館　主催

日本印度学仏教学会第六十三回学術大会実行委員会　後援

「鶴見大学図書館所蔵貴重書展」に寄せて

今般、人文系の学会として最大級の規模を誇る日本印度学仏教学会の第六十三回学術大会が本学を会場として開かれるのを機に、本学所蔵の主要な仏教貴重書を展示する「貴重書展」を催すこととなった。開催に当たって、ご協力・ご助言いただいた関係者各位に厚く御礼申し上げたい。

本学園は、創立以来、間もなく九十年を迎える。また来年は、鶴見大学文学部が開設五十周年、同短期大学部が開設六十周年の記念の年に当たる。この間、本学は、充実した教育・研究の遂行を図る一環として、古代から近代に至る貴重書の蒐集にも力を注いできた。その中には、例えば、横浜市有形文化財に指定されている、「興福寺永恩具経」と呼ばれる奈良時代写本『大般若経』（巻第百七十六～百八十）や、わが日本曹洞宗の開祖道元禅師ご自筆の「対大己五夏闍梨法」断簡（道正庵切）がある。また、ソグド文字で書かれたトルファン出土の『善悪因果経』断簡なども蔵する。今回は、これらの展示のほか、仏教関係の写本・刊本を豊富に揃えて展示する。

先人たちが残してくれた貴重な文献類にじかに触れること――それは、私たちの学習・研究の意欲を掻き立て、私たちに深い喜びをもたらし、また歴史的な時間を超えて私たちを豊かなイメージの世界へと誘ってくれる。このことは、私自身が幾度も経験してきたことでもある。多くの方々に、今回の「貴重書展」に足を運んでいただきたいと心から願うゆえんである。

学校法人　総持学園
鶴見大学・鶴見大学短期大学部
学長　木村清孝

展示書目録

1 ◎賢愚経　巻第九断簡（大聖武）額装一葉
2 ◎紺紙金銀字不空羂索神変真言経　巻第二十八断簡（中尊寺経）軸装一幅
3 ◎仮名観無量寿経　断簡　軸装一幅
4 ◎毘尼討要　巻第一断簡　軸装一幅
5 ◎対大己五夏闍梨法　断巻（道正庵切）額装二葉
6 ◎ソグド語善悪因果経断簡　一幅（両面書写）
7 ◎大般若波羅蜜多経　巻第百七十六～百八十（永恩具経、横浜市指定文化財）五巻
8 ◎大般若波羅蜜多経　巻第二百八十五（東大寺八幡経、横浜市指定文化財）一巻
9 ◎観普賢経私記（来迎院如来蔵本）列帖装一冊
10 ◎東寺伝授書三種
　イ、第三重口決　一巻
　ロ、大次第口決　一巻
　ハ、光明真言口伝　一巻
11 ◎大陀羅尼末法中一字心呪経（高麗再彫大蔵経本）袋綴一冊
12 ◎仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼経残本（宋版）折本一帖
13 ◎宗鏡録巻第四十九（元版大蔵経本）折本一帖
14 ◎弥陀往生浄土懺儀一巻（明版）折本一帖
15 ◎大般若波羅蜜多経　巻第百八十二（嘉禄版）一巻
16 ◎大般若波羅蜜多経　巻第二百三十三（大乗寺銀界装飾経）折本一帖
17 ◎仏説盂蘭盆経疏科文　残巻（泉涌寺版）折本一帖
18 ◎仏制比丘六物図（五山版）袋綴一冊
19 ◎仏果圜悟禅師碧巌録十巻（五山版）袋綴五冊
20 ◎佛祖正法直傳一巻（五山版）袋綴一冊
21 ◎柿　経（元興寺伝来）二十七葉

解題

1◎賢愚経　巻第九断簡（大聖武）額装一葉

［けんぐきょう］

紙本墨書
縦二七・四糎　横七・八糎
奈良時代写　伝聖武天皇筆

『賢愚経』は『賢愚因縁経』ともいい、中国北魏の慧徳・曇覚等によって漢訳されたと伝えられる、六十九篇の説話を集成した全十三巻からなる仏教経典である。

展示書は巻第九「善事太子入海品第三十七」の内容を、白麻紙に香木の粉末をすき込んだ「茶毘紙」と呼ばれる料紙に薄い墨で界線を引き、一行十二字詰に大粒の文字で書写したものである。独特な書式や端正で重量感に溢れる大字で堂々たる風格は、東大寺に伝来したことから「大和切」、また聖武天皇筆との伝承もあって「大聖武」の名で呼ばれている。

国宝指定となった東京国立博物館所蔵「賢愚経残巻（大聖武）」や、東大寺、前田育徳会、白鶴美術館に所蔵されている巻子本以外は、断簡（大和切）として掛幅仕立や古筆手鑑の巻頭を飾るものとして伝存する。

2◎紺紙金銀字不空羂索神変真言経　巻第二十八断簡（中尊寺経）軸装一幅

［こんしきんぎんじふくうけんさくしんぺんしんごんきょう］

紺紙金銀字
縦二五・六糎　横五〇・二糎
平安時代後期写

『不空羂索神変真言経』は中国唐代の菩提流志によって漢訳された全三十巻からなる密教経典である。展示書は巻第二十八「清浄蓮華明王品第六十七」の内容を紺色に染めた料紙に一行ごとに金字と銀字で交互に、一行約十七字で全二十八行に書写したものである。その優美な筆致などから平安時代後期の書写と思われる。銀字はやや黒ずんでいるが、金字はよく光沢をとどめ、そのコントラストが美しい。

この断簡は、その特徴的な書式と書風などから、「中尊寺経」と通称される「紺紙金銀字交書一切経」のテキストのうちの一紙だったと考えられる。金銀交書経はこのほか、伝慈覚大師筆とされる建暦寺本『法華経』、道風筆と伝えられる五島美術館所蔵『法華経』なども広く知られている。

ちなみに、本断簡は桐箱入りで、田中塊堂（一八九六～一九七六）による箱書には「紺紙金銀交書経中尊寺経断巻」（蓋表）、「浪華法眼　塊堂題［朱白文印］」（蓋裏）とある。塊堂は古写経・古筆の先駆的研究者として多くの業績を残し、また仮名書家としても著名な方であった。

3◎仮名観無量寿経　断簡　軸装一幅

［かなかんむりょうじゅきょう］

紙本墨書
縦二五・六糎　横九・九糎
鎌倉時代後期写　伝後京極良経筆

『観無量寿経』は、『阿弥陀経』『無量寿経』と並んで浄土三部経とも呼ばれ、東アジアでは広く愛読・信奉される仏教経典である。展示書は、漢文の『観無量寿経』を書き下し訓点を施した内容を、白界の引かれた斐紙に書写したものである。おそらく元来横幅十三糎程度の細長い粘葉装、丁の表面にあたると想定される。

力強い書風は、後京極良経（一一六九～一二〇六）の風格を彷彿とさせる、鎌倉時代後期の典型的な後京極様と思われる。仏典の訓み下しとは言え、研究的・草稿的書物ではなく、読誦もしくは調度用に製作されたものと推測される。この種の典籍は鎌倉時代以降の例がほとんどなく、書誌学上からも国語学的資料としても貴重である。

4◎毘尼討要　巻第一断簡　軸装一幅

［びにとうよう］

紙本墨書
縦二六・七糎　横五六・六糎
平安時代中期写

展示書は一紙のみの残簡、楮紙に薄い墨線を引き、一紙三十四行、一行約二十五字で書写されている。「愛宕／神社」の朱印があるため、愛宕神社の旧蔵であることがわかる。

内容は、中国唐代の律宗学僧である道世が著した『毘尼討要』巻第一の「教興由致章第二」の最後の部分から「篇聚釈名章第三」の冒頭部分に当たるものである。道世は、字は玄惲、『法苑珠林』百巻や『諸経要集』二十巻の著者として名高い。『毘尼討要』は道世の弘法寺時代の著作であり、顕慶三年（六五八）までに完成されていたと推測されている。写本自体は、料紙や書体から平安時代中期の書写であろうと思われる。

5◎対大己五夏闍梨法　断巻　（道正庵切）　額装二葉

［たいたいこげじゃりほう］

紙本墨書
縦二三・九糎　横一四・四糎
寛元二年（一二四四）写

入門して程たぬ修行僧に、大己（先輩僧侶）に対する礼法を六十二条にわたり説示された「対大己法」（『永平大清規』第二篇）の断簡で、道元四十五歳、壮年期の気迫みなぎる唐様の筆跡である。道元に随侍した俗弟子の木下道正が帰国後京に薬舗を構えた庵（現在の京都市上京区道正町）に所蔵されていたと伝えられるため、「道正庵切」とも称され、京都国立博物館蔵国宝手鑑『藻塩草』所収の切の裏面に当たる。

斐紙の一面に白界六行を施し十丁二十面より成っていた粘葉装の冊子と推定されるが、現存するのは本学に所蔵の二葉を含めて、わずか五葉と三行だけである。

本書巻末識語に当る断簡が出光美術館蔵国宝手鑑『見ぬ世の友』に収められ、「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日」なる年記と「道元（花押）」と署名までも見られるので、同じく自署を有する永平寺蔵国宝『普勧坐禅儀』と並び、極めて稀な道元真筆墨跡の中で、自筆か否かを鑑定する上での根本真跡資料となっている。

6◎ソグド語善悪因果経断簡　一幅（両面書写）

［そぐどごぜんあくいんがきょう］

紙本墨書
横一一糎　縦二六・二糎
大谷探検隊将来（吉川幸次郎旧蔵本）

『善悪因果経』は、因果応報を説く経典として六世紀頃に中国で成立した文献である。いわゆる「偽経」のためか、二十世紀の初頃敦煌文書から発見されるまで、漢文テキストはしばらく中国で散逸していた。その一方では、ソグド語、チベット語、モンゴル語、カルムイク語、満州語の諸言語に翻訳されるほど、東アジアから中央アジアにかけて広く流布していた。

展示書は、大谷探検隊が中国新疆のトルファン盆地から将来した古文書等に含まれたソグド語文献である。その内容は、漢文『善悪因果経』をソグド語に翻訳された仏典だと判明している。

7◎大般若波羅蜜多経　巻第百七十六～百八十　（永恩具経、横浜市指定文化財）　五巻

［だいはんにゃはらみったきょう］

紙本墨書
（巻第百七十六）　縦二五・三糎　横七八二・三糎（十四紙）
（巻第百七十七）　縦二五・三糎　横八八七・四糎（十六紙）
（巻第百七十八）　縦二五・三糎　横八八四・一糎（十五紙）
（巻第百七十九）　縦二五・三糎　横九三九・三糎（十八紙）
（巻第百八十）　縦二五・三糎　横八四一・七糎（十六紙）
奈良時代写　天福元年（一二三三）興福寺永恩加点

大般若経六百巻は般若経典群の集大成で、玄奘三蔵（六〇二～六六四）が最晩年に完訳したものである。展示書は、「永恩具経」と呼ばれる大般若経六百巻のうち、巻第百七十六から第百八十巻までの五巻であり、平成五年に横浜市教育委員会より「横浜市指定有形文化財」に指定されている。

「永恩具経」とは、興福寺の蔵司永恩が、鎌倉時代前期の貞永・天福（一二三二～三三）前後、かねて蒐集していた天平時代から平安時代初期までの大般若経六百巻の全巻にわたって朱の句点を施し、一具として自らの氏神である河内国玉祖神社に奉納したもの。本学所蔵の五巻すべてにも朱の句点があり、巻第百七十六より百七十九までには巻末に朱で「句切了永恩」と記されるのみだが、巻第百八十の巻末には、

天福元年癸巳五月廿六日興福寺偕馬道以東
為第二房句切了　永恩生年六十七

と朱書の奥書が記されている。

こうした加点奥書は十巻ごとに記すのを原則としたらしいが、巻第五百九十一には「貞永二年癸巳」の朱書があったという。貞永二年（一二三三）は四月十五日に天福に改元されているので、永恩の加点が巻序に従ったのでないことを知る。永恩具経は四十巻ほどの現存が確認され、雄渾にして秀麗な書法は見事であり、特に五巻が連続して揃っているのは極めて貴重である。

8◎大般若波羅蜜多経　巻第二百八十五（東大寺八幡経、横浜市指定文化財）一巻

［だいはんにゃはらみったきょう］

紙本墨書
縦二六・二糎　横五二糎（第二紙）　全長八六二・五糎（一七紙）
嘉禄三年（一二二七）写

展示書は、表紙は逸失したが本文の欠落はない。銀杏形の鍍金軸を持ち、軸木には薬師十二神将・四天王の梵字と願をかける修字からなる梵字が十七字墨書されている。黄檗染めの料紙に、一紙二十七から二十八字行、一行は十七字で書写されているが、文字はわずかに藤原経の特色を残している。紙背には一紙ごとに「東大寺／八幡宮」の墨印（計十七顆）が捺されており、巻末には別筆による以下の奥書がある。

奉加　銭百文　尼 善阿弥陀佛
奉加米一石御経蔵造營五百人之内比丘尼善阿弥陀佛
壽

「善阿弥陀仏」という比丘尼については不明であるが、墨印と奥書から、これは鎌倉時代前期を代表する写経「東大寺八幡経」のうちの一巻であるとわかる。

東大寺八幡経は諸家に分蔵されているが、現存写本の奥書によると、東大寺伽藍の安穏のため尼成阿弥陀仏が発願し、嘉禄二年（一二二六）から安貞二年（一二二八）四月十一日までに書写され、東大寺鎮守八幡宮に奉納されたことが判明している。本巻の奥書から、嘉禄三年（一二二七）に善阿弥陀仏等五百人の寄進によって本巻を納める経蔵が造営されたという東大寺を中心とした南都の教団実情が伝られる貴重な資料である。

9◎観普賢経私記　（来迎院如来蔵本）　列帖装一冊

［かんふげんきょうしき］

紙本墨書
縦二五・五糎　横一五・七糎
建保五年（一二一七）禅寂写

列帖装、楮打紙。表紙は雲母引地茶唐草文摺付、ただし左端には摺付の紙を欠き、そこに外題打付墨書「□普賢経私記　如来蔵」、同筆にて右下に「覚阿」とある（共に本文とは別筆か）。巻首に「観普賢経私記」という内題、巻尾には「普賢経私記」という尾題がある。墨付二十七丁・後遊紙一丁（一折七紙十三丁、二折八紙十五丁、残り各一丁は前後見返）、四周単辺有界（すべて白界）七行二十一字前後。

（奥書）

一校了

本云
保元三年十月十日於白河御房手自書写之此書慈覚
大師草云々三井本也書本文字狼藉歟沙門澄憲卅三

建保五年八月十三日書校了為補如来蔵之闕也
沙門禅寂
以正本重可比校　（第二十七丁表）

或人云、此記慈覚大師記云々
私云、広智菩薩奉借書籍於慈覚大師之目録有
普賢私記若此記歟可尋之　禅寂　（第二十七丁裏）

奥書によれば、慈覚大師円仁（七九四～八六四）の草とされる本書（三井寺本）を、保元三年（一一五八）十月十日、安居院流唱導の大家澄憲（一一二六～一二〇三）が白河御房で書写したが、文字狼藉とあるように、善本ではなかったので、建保五年（一二一七）八月十三日、如蓮上人禅寂（来迎院五世長老）が如来蔵本の欠を補うために校合したものであることがわかる。また前表紙の右下に「覚阿」、書名の下に「来迎院」とあるから、ある時期に覚阿が所持していたことと、来迎院常住（如来蔵本）であったことがわかる。なお、来迎院如来蔵は、三千院円融蔵、勝林院勝林蔵とあわせ、大原三文庫の一つとして有名である。

10◎東寺伝授書三種

イ、第三重口決　一巻

［だいさんじゅうくけつ］

紙本墨書
縦一四・一糎　横四三・一糎（第二紙）
鎌倉時代初期写

東寺旧蔵本。斐紙に薄い墨線を引き、一紙十九行、一行約十字で書写されいている。表紙を欠くが端裏書「保延記」とあることや、文献の内容や奥書から、保延六年（一一四〇）三月十三日、定海が著した第三重口決であることがわかる。早稲田大学図書館本（江戸時代写、『安祥寺流通用字輪観口決』に合綴）と照合した結果、訓点

などわずかに出入りが認められるが、その料紙や書体などから鎌倉時代初期の転写本と思われる。

定海（一〇七五～一一四九）は平安時代後期の真言宗の僧で、後に醍醐三宝院流の祖になり、三宝院大僧正・上生僧正とも称された。醍醐寺座主・東大寺別当になったが、天承元年（一一三一）護持僧となり、鳥羽上皇・崇徳天皇の病気平癒をはじめ、しばしば効験を表している。また定海は本書のほかに『最秘口決』や『醍醐灌頂』も残している。

（奥書）
保延六年三月十三日記之了
定　海

ロ、大次第口決　一巻

［だいしだいくけつ］

紙本墨書
縦一五・二糎　横四四・八糎（第二紙）
建暦元年（一二一一）写

東寺旧蔵本。全六紙の斐紙に、一紙約二十七行書写されている。仁海（九五五～一〇四六）の口決を成尊（一〇一二～一〇七四）が記したもので、建暦元年（一二一一）三月二日、室生寺住の某が書写した旨の奥書があり、端裏書に「大次第口決」とある。意生金剛など金剛界理趣会十七尊を掲出し注釈しているから、「理趣会」や『理趣経法』関するものと思われるが、『義述』を引用し注釈している。

（奥書）
建暦元年三月二日書之
室生山寺住

右御正（聖）教之中不懸思検出了
小野僧正御房同僧都御房御
口御記也 此無門可入之者也
秘蔵之外無他事
金剛佛子元初七十九 通五十九

應永十一年甲申卯月廿九日酉尅於
宀（室生）山閑寂臺被見尅也（花押）

ハ、光明真言口伝　一巻

［こうみょうしんごんくでん］

紙本墨書
縦一四・九糎　横四七・五糎（第二紙）
弘長四年（一二六四）写

東寺旧蔵本。斐楮混漉の料紙（全六紙）に一紙約二十七行詰めで書写されている。表紙を欠き精確な書名は明らかでないが、奥書から醍醐寺座主・東寺長者実賢（一一八〇～一二四九）の口授を、弘長四年（一二六四）二月八日、高野山尺迦院南房において盛深が書写したものであることがわかる。端裏書に「光明真言口伝実一」とあるが、内容は「光明真言法曼荼羅」「光明真言法護摩」からなる。

光明真言の功能について『不空羂索経』は、十悪五逆の重罪を犯した者でも、光明真言で加持した土沙をその屍や墓の上にかけると、罪障を除滅し無上菩提を得るとするが、白河院・後鳥羽院・一条院妃・建春門女院の中陰にあたり、その得脱を願い勝覚・源運・勝憲・義範・勝憲によって治められたと伝えられる。

（奥書）
本云
承久二年庚辰正月廿五日
私師云
比書ハ醍醐座主東寺一長者
前大僧正御房實賢御口受
也最秘々々努々

弘長四年辛巳二月八日於高野
山尺迦院南房寫書了
求法沙門盛深

11◎大陀羅尼末法中一字心呪経　（高麗再彫大蔵経本）　袋綴一冊

［だいだらにまっぽうちゅういちじしんじゅきょう］

紙本木版
縦二九・八糎　横二二・四糎
十三世紀高麗刊

高麗再彫大蔵経本。高麗再彫大蔵経は、主として北宋開宝蔵の覆刻版である高麗初彫大蔵経（一〇一一～一〇八二年）を契丹蔵（九九〇～一〇一〇年）などによって校訂した版本大蔵経である。高麗では、初彫大蔵経の版木が蒙古軍侵入によって焼失、高宗は蒙古軍の退散を祈願して江華島に大蔵都監を置き、その再版を企て、高宗

三十八年（一二五一）に完成した。一五一一部六八〇二巻の偉様で、その版木は現在でも海印寺に収蔵されている。

展示書はその装丁から李朝になってからの後印と思われる。表紙に、

□□一字心呪經
附
百変法経
穢跡金剛法術霊要門

とある通り、三つの経典の合冊である。全三十九丁のうち、第一から第二十六丁までは『大陀羅尼末法中一字心呪経』であり、巻末の「壬寅歳高麗国大蔵都監奉／勅雕造」という刊記によれば、一二四二年の彫造であるとわかる。第二十七丁から第三十三丁までは『穢跡金剛説神通大満陀羅尼法術霊要門』であり、第三十四丁から第三十九丁までは『穢跡金剛禁百変法経』であり、いずれも「丙午歳高麗国大蔵都監奉勅雕造」の刊記を持っており、一二四六年の彫造だと知られる。裏表紙の見返しに「乙丑上韓海印寺得来」との墨書がある。

12◎仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼経残本　（宋版）　折本一帖

［ぶっせつしょうかんじざいぼさつふくうおうひみつしんだらにきょう］

紙本木版
縦二八糎　横一一・四糎
十二世紀刊

展示書は、二十三折が残存する折本、版式は、毎版三十六行、毎行十七字、半折六行からなり、版心には函の千字文・巻次・版次・刻工名が順次に刻まれている。表紙には「不空羂索神変真言経」とあるが、実際の内容は、前半の六紙が『仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼経』（全一巻）の第二紙から第七紙までの残巻（巻首と巻末それぞれ一紙は欠落）に、『不空羂索神変真言経』（全三十巻）第一巻の巻末にあたる二紙（第十三～十四紙）を繋ぎあわせたものである。

展示書は徳富蘇峰の旧蔵にかかるもので、印記と帙に書かれた識語によると、元々東福寺塔頭の三聖寺宋版仏教所にあったらしく、蘇峰は北宋版と断言している。両経の千字文や特徴的な版式や版心に刻された刻工名から、北宋版の「毘廬大蔵経」のテキストであることは明らかである。ちみなに、毘廬蔵とは、中国北宋政和二年（一一一二）から南宋紹興二十一年（一一五一）まで開板された私版大蔵経である。

13◎宗鏡録巻第四十九　（元版大蔵経本）　折本一帖

［すぎょうろく］

紙本木版
縦三〇糎　横一一・五糎
十三世紀刊

『宗鏡録』百巻は中国五代の永明延寿（九〇四～九七五）が、インド・中国の大乗経論をはじめ、禅僧の語録、戒律書、俗書をひろく渉猟し、法相・三論・華厳・天台を折衷して禅に融合させた大著である。展示書は元代刊本の普寧寺版大蔵経テキストである。

普寧寺版大蔵経は、元・至元十四年（＝南宋景炎二年〈一二七七〉）から同二十七年（一二九〇）にかけて中国杭州の大普寧寺で開板された私版大蔵経である。普寧寺版は南宋の思渓版大蔵経の重版をめざしたため版式などは同じであるが、福州東禅寺版・開元寺版とも校合した善本とされている。

展示書は折本一貼、全二十四折からなる。赤褐色原表紙長くして全体を包み込む帙型折本の原形をそのまま留め、帙表に「宗鏡録巻第四十九」と打ち付けされている。版式は、毎版三十行、毎行十七字、毎半折六行、版心には函の千字文、冊数に続き「馬明勝」と刻工名が付刻されている。巻末の尾題の下に「綺九」とあり、「綺」函の第九冊ということを示しているところにも普寧蔵の特徴が表れている。本書の末尾に、難字の発音を示す反切に続き、「徑山興聖萬壽禪寺首座沙門慧元重校」という校記がある。識語の左下には「寶玲文庫」の朱印が捺されている。

14◎弥陀往生浄土懺儀一巻　（明版）　折本一帖

［みだおうじょうじょうどさんぎ］

紙本木版
縦三三・四糎　横一二・二糎
明永楽十八年（一四二〇）刊

展示書は、全五十折からなる折本装丁、版式は、毎版二十五行、毎行十六字、半折五行というものである。表紙は原装で、見返しと尾にそれぞれ三尊仏と韋駄天像の絵があり、その頂門・首・腹部の三つの部位には紙背に朱筆で梵字が加えられている。序に「永楽十八年八月初二日皇太子高熾謹施」とあり、明第四代の王で仁徳の誉れが

高かった仁宗が、皇太子時代の永楽十八年（一四二〇）に発願して開板させたものとわかる。版式等の特徴から、いずれの明版大蔵経にも属さない単行本で、類似本をほかにみない貴重なテキストである。

内容は浄土往生を目的とする懺悔実践の儀軌であり、中国天台学僧遵式（九六四～一〇三二）が著した『往生浄土懺願儀』という文献における「第四焼香散華」「第五礼請法」「第六讃歎法」「第七礼仏法」「第八懺願法」「第九旋遶誦経法」の本文とはほぼ一致するが、小字割注の作法説明の内容においてはかなりの相違がある。おそらく明代の仏教信者の間で流布していた懺悔儀式の教本の一種だったと思われ、明代まで遡る現代仏教の源流を研究する上では貴重な文献である。

15◎大般若波羅蜜多経　巻第百八十二（嘉禄版）一巻

［だいはんにゃはらみったきょう］

紙本木版
縦二六・二糎　横四五糎（第二紙）
鎌倉時代前期刊

嘉禄版大般若とは、貞応元年（一二二二）から嘉禄三年（一二二七）に奈良興福寺で開版された大般若経六百巻のことである。展示書は、嘉禄版の版木を用いて、弘安八年（一二八五）に橘乙女という女性の発願によって奉納されたもののうちの一巻である。版式は一版二十四行、一行十七字、三、四巻に一巻の割り合いで、巻末に「弘安八年橘乙女」なる墨書がある。箱書には「吉野蔵王堂伝来春日版」とある。巻首の内題の下には「寶玲文庫」の朱印が捺されている。

16◎大般若波羅蜜多経　巻第二百三十三（大乗寺銀界装飾経）折本一帖

［だいはんにゃはらみったきょう］

紙本木版
縦二六・一糎　横九・四糎
南北朝時代刊

折本一貼、全五十二折からなる。版式は、毎版二十四行、毎行十七字、半折五行というものである。香色地に金銀切箔・霞引を施した表紙の中央に、「三百内四帙三」という墨書がある。後表紙長くして全体を包み込む帙型折本の形を原装のままに伝える。帙表に「大般若波羅蜜多経巻第二百三十三」と墨書されている。巻首の扉絵には「大般若会」の本尊である釈迦三尊を中心に、同経の護封神である十六の善神像や大般若経の笈を背負う玄奘三蔵と深沙大將像が描かれている。見返しには「春翠文庫」（中島仁之助）の朱文印がある。

斐楮混漉の厚手の料紙全面に銀界を引き、行間に経文を肉太の濃墨で刷った装飾経。素朴で力強い書風を用いた春日版風の版式、尾題下に「開板明隆」と刻すが、他の部分と比べ墨付き悪く、埋木の可能性を否定しえない。やや摺り疲れのある版面ゆえ、本文刻成自体は南北朝の早い頃までさかのぼるか。巻首に「池奥常住」、尾に「願主比丘尼宗室」「時永徳癸亥夏六月念八日也」「奉入大般若経　大乗寺」等の墨書あって永徳三年（一三八三）の奉納と知られる。

17◎仏説盂蘭盆経疏科文　残巻（泉涌寺版）折本一帖

［ぶっせつうらぼんきょうしょかもん］

紙本木版
縦三〇・七糎　横一〇・八糎
永仁年間（一二九三～一二九九）刊

展示書は折本一貼、現存九折（厚目の楮紙六紙）、巻尾一紙を欠く残本である。表紙の外題には「盂蘭盆経疏科文」とあり、内題「仏説盂蘭盆経疏科分二」の下には「大宋餘杭沙門元照　録」とある。京都東山の泉涌寺開版の宋版の覆刻版である。泉涌寺は、寛元四年（一二四六）の『仏制比丘六物図』の開版を筆頭に律再興の祖俊芿（一一六六～一二二七）が将来した宋版を底本にして数々の教学書を覆刻している。

18◎仏制比丘六物図（五山版）袋綴一冊

［ぶっせいびくろくもつず］

紙本木版
縦二七・八糎　横一八・七糎
室町時代中期刊

展示書は、やや厚手の楮紙に半丁七行、毎行十七字で書写されている。図六面、墨付全三十一丁。表紙は改装されているが、見返しに「持明院教誉」の手沢名があり、巻首に「三井家」の朱印がある。

内容は、比丘必具の六物である僧伽梨（大衣）・欝多羅僧（七条衣）・安陀会（五条衣）・鉢多羅（応量器）・尼師壇（座具）・漉水嚢を図示し解説したものである。最終丁の裏面に展示書は巻末の刊語によると、俊芿が宋で学んだ元照（一〇四八～一一一六）撰の本書を弘宣するため、孫弟子道玄が寛元四年（一二四六）泉涌寺で出版した覆宋刊

本にあたる『仏制比丘六物図』の印板が湮滅したため、了珍が南禅寺で再刊したものである。南禅寺真乗院は大応派香林宗簡の塔頭で、宝徳二年（一四五〇）の成立とされている。彫版はやや粗い感じを受けると共に、泉涌寺版とは版式を異にしている。

この南禅寺版の伝本は少なく、本書以外に大東急記念文庫本・東洋文庫本など五本が知られるのみである。なお本書の刊行年時は、真乗院成立の宝徳二年から、大東急記念文庫本にある東福寺百八十四世自悦守懌の識語にみえる明応四年（一四九五）の間とすることができる。

19◎仏果圜悟禅師碧巌録十巻　（五山版）　袋綴五冊

［ぶっかえんごぜんじへきがんろく］

紙本木版
縦二五糎　横一五・四糎
室町時代初期刊

中世の禅宗寺院、特に五山と呼ばれる鎌倉・京都の主要寺院においては、鎌倉後期から禅宗関係の語録類及び外典と呼ばれる漢詩文書の出版が行なわれ、南北朝期に最高潮に達する。しかし室町時代に入ると、出版点数はやや減少に転じ、十五世紀半ば以降はむしろ地方の有力守護大名の保護のもとで、地方禅宗寺院における小規模な出版が各地で行われるようになる。これらを総称して「五山版」と呼び、日本の出版史研究や書誌学研究上の貴重な資料として重視されてきた。

展示書は、禅宗の宗門第一書とも称され、中国、日本の禅林では広く読まれてきた『碧巌録』十巻の五山版である。『碧巌録』は、北宋の雪竇重顕が禅宗灯史や語録から選んだ祖師の古則などに頌した「雪竇頌古百則」に対して、圜悟克勤が垂示・著語・評唱を加えたもので、元の大徳四年（一三〇〇）に初めて刊行された。日本では、南北朝前半に建仁寺天瀾庵龕住の玉峯正琳によって開板された元版の覆刻本が最初であったが、それ以来、京都、鎌倉の五山を中心に諸所の禅宗関係者より繰り返し出版された。

展示書の巻第五の巻尾には長文の刊記があり、巻第七、第九、第十の末尾には「玉峯刻梓」との刊記が刻み込まれていることから、本書は日本最初の刊本にあたる玉峯刊本の重版テキストであることが判明した。なお、本書はこの種の版の現存唯一の伝本である。

20◎佛祖正法直傳一巻　（五山版）　袋綴一冊

［ぶっそしょうぼうじきでん］

紙本木版
縦二六糎　横一七・四糎
応永三年（一三九六）刊

本書は、鎌倉・南北朝期の禅僧、峰翁祖一が編纂した、過去七仏から西天二十八祖、さらに唐土は達磨から六祖、そして青原下は龍潭崇信、南嶽下は天童咸傑まで至る四十七名の禅僧を記す燈史『佛祖正法直傳』の五山版テキストである。表紙の左端に外題「佛祖正法直傳　全」と墨書、墨付五十丁（半丁十行、一行二十字）、第五十丁裏面に「應永丙子孟冬下瀚／重命工刊行」と刊記がある。

五山版『佛祖正法直傳』は、もともと月庵宗光という禅僧が康暦三年（一三八一）に刊行したことが、応永十一年（一四〇四）重刊本によって知られる。しかし、本書はそれらと版式を異にするもので、これまで東洋文庫蔵本のみが伝えられる稀覯本である。そもそも五山版においては、日本人禅僧の著作を刊行することは、一部の著名な禅僧の語録を除くと非常に珍しく、同時に日本人禅僧の禅宗史観を知る上で貴重な資料である。また、返り点・送り仮名等の訓点が詳細に記されており、当時の禅宗寺院における漢文訓読の実態を示す好箇の資料である。

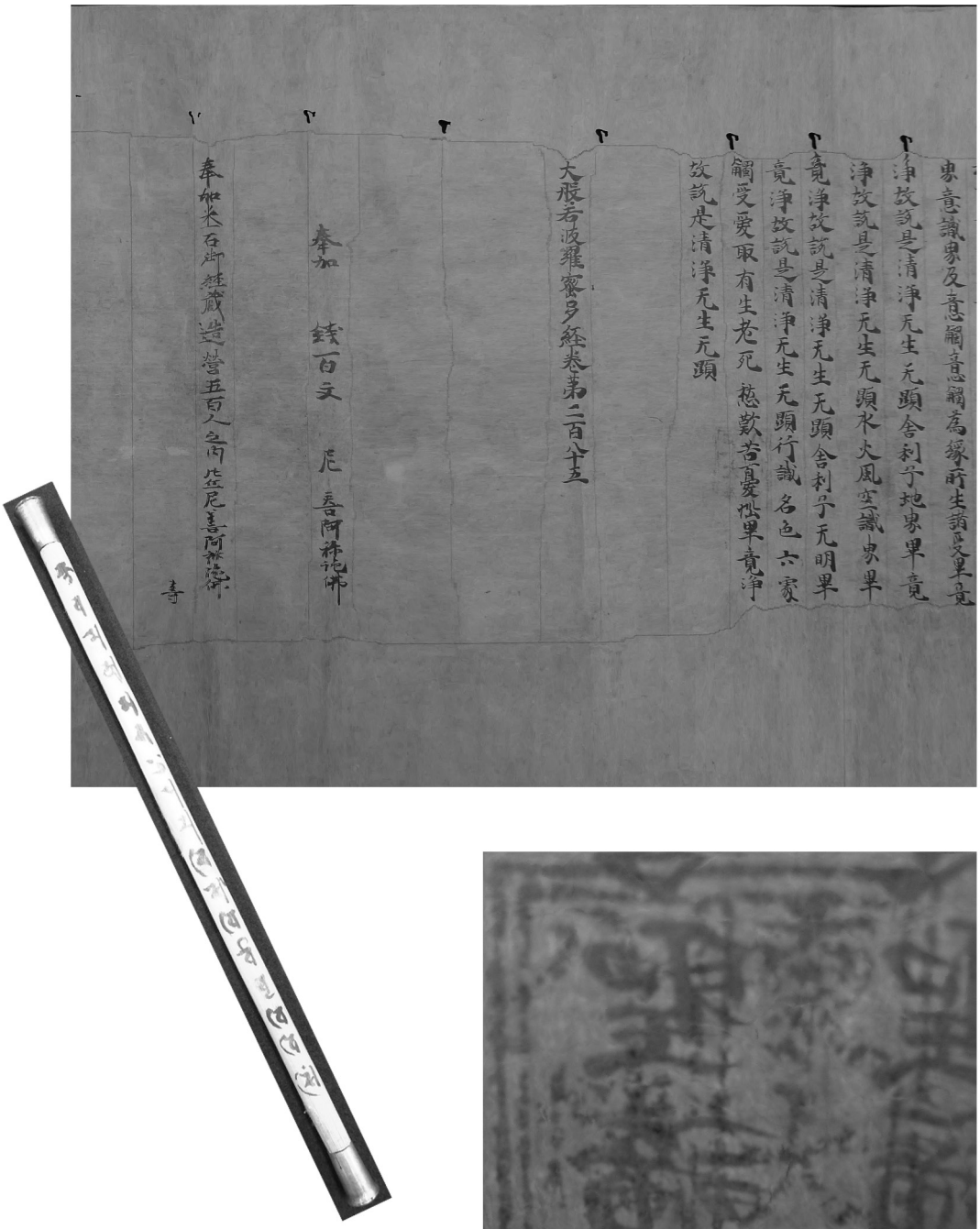
21◎柿　経　（元興寺伝来）　二十七葉

［こけらきょう］

木片墨書
縦二五～三〇糎　横一～三糎　厚〇・一～〇・三糎
鎌倉時代後期写

柿経とは、「笹塔婆」ともいい、頭部を圭頭あるいは五輪塔形にした檜の木片に仏典の経文を墨書したもの。写経と造塔の両功徳を同時に行う目的と、奈良時代以来の板に文字を書く木簡の伝統の中で、平安時代後期に生まれた。写経と同様に一枚につき一行十七文字を書き、経筒、経函などに納めて埋められたか、お寺に奉納されるか、また川に流される場合もある。

展示書は、元々奈良元興寺極楽坊の本堂内に納められた、十四世紀頃に書写された柿経の一部である。各葉の表裏に一行十七字から二十字になる『法華経』などの経文が書写されている。



大般若波羅蜜多経　巻第二百八十五　（東大寺八幡経、横浜市指定文化財）

（※展示 NO.8）